っていることでやっと価値が出て来たと自負できるにすぎぬ。日本で，おそらくは自分1人しか持ってないだろうなどと自慢できる本は，このフォイグトのもの1冊ということになる。世の中には途方もない本を持っている人も多いから，もち論安心はできないが，この本は小説や詩ではない。ごく地道な研究書だ。そんなものに興味を持つ人は限られているはずである。

しかし，考えて見れば情けない話だ。一応専門の研究者というものになっているくせ，所持する専門書の中で父に買ってもらった本しか自慢できるものがないのである。30年ちかく教師をしていて，自力では1冊もそれを凌駕するものが買えなかったとはである。とりわけ，それが資力の問題でないことが一番つらい。実は，それ以後読みたい本があっても，それを発見しようという努力をしなかったということなのである。いいかえれば，学生時代ほど学問に集中しなかった，研究意欲が低下する一方の30年間という証明にもなりそうだ。何とかして，もう1冊ぐらい珍らしいものを手に入れてやれという気にもなろうというものである。もっとも，そういう心がけではとてもよいものは手に入りそうもないし，それでは安心立命できるわけでは到底ないのだが。　　（人文科学研究所教授）

## 寄贈図書の評価基準まとまる

従来部局間で不統一であった寄贈図書の評価基準をこの際統一して，少しでも業務合理化の一助にしたいという趣旨から本館と部局図書室の間で検討していたが，このほど評価基準製がまとまったので解説してみたい。

この評価は時価で行なうのがたてまえであるので，基準算定の方法として和書については出版年鑑1968年版によって主題別，版型別と社会・自然系に分けて約350冊を抽出した。また洋書，中国書等は現物に当って調査し，1ページ当たりの単価をそれぞれ算出し，それを根拠にして作成されたものである。

この表をみればわかるようにやはり人文社会系と理工系とでは価格上ひらきがあって大判になるほどその差が大きいこと。洋書のうち，英・仏書はほぼ等しいが，ドイツ書はやや高い。中国書には北京版，香港版，台湾版がそれぞれ少し価格差があることなどがうかがわれた。

この基準表はただ評価の一つの目安と考えるべきで，個々の図書の特殊性に応じて評価額を適宜しんしやくすべき場合ももちろんあるが，現時点での一応の基準を示すものと考えられる。

昭和43年9月

| 区分 | 和書 | | 洋書 | | 中国書 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 社会 | 自然 | 社会 | 自然 | 平装本 | 精装本 | |
| A6 | 1円 | 1円 | 円 | 円 | 1円 | 2円 | ロシヤ語は和書に準ずる |
| B40 | 1 | 1 | | | | | |
| B6 | 2 | 3 | 3.5 | 5 | 1 | 2 | |
| A5 | 3.5 | 5 | 7 | 10 | 1.5 | 3 | |
| B5 | 6 | 6.5 | 10 | 14 | 2 | 4 | |
| A4 | 8 | 10 | | | | | |

（注　ページ単価）